



ありのまま、このまちで生きている。
子育てにも、自分の生き方にも、悩んで、迷って、笑って。
踏み出した一歩に「いいね」と声を掛ける誰かがいて、新しいつながりが紡がれていく。
そんな姿を見ると、ふと思う。「自分も何かできるかも」
あなたのやりたいこともきっとかなう。

やってみたいがかなうまち

私たちのやってみたいこと

ありのまま

このまちと生きる



平 見舞子さん。14年前、結婚を機に大府に転入しました。

間もなく出産し、子育てに追われる日々。まちで出会う人々は、気さくに声を掛けてくれたり、進んで手助けしてくれたりして、温かい場所だと感じました。しかし拭えなかったのは、仕事も友人も無く、社会とのつながりが断たれたような不安や焦り。平見さんの子育てのスタートは、まちの人の温かさを感じる一方で、母としてここにいる自分が「これからどう生きたいのか」を考える時期でもありました。

「やりたいことに真つすぐ」を実践する人たちとの出会いが、平見さんの生き方の原点となりました。

仲間と踏み出す 次の一歩

元々、体と心の健康に興味があり、保健体育の教員の経験もあった平見さん。友人たちと、命の大切さや家族の絆を伝える映画を上映したり、学校生活に悩むこどもや保護者の支援に関わったりします。

活動の拠点となった市民活動センター「コラビア」でも、価値観を共有できる仲間と出会います。親ならではの悩みを分かち合う



こどもも母も

母も、自分らしく

近藤さんは「お母さんにも、自分を見失わずにいてほしい」と話します。

「情報が多すぎる今、自分の子育てに不安を持つ方がとても多いんです。だから、ここでは『私もそうだったよ』『それで、大丈夫だよ』って言い合える時間を大切にしています。横に並んで、聞いてくれる人が近くにいると思えるだけで、表情が変わるんです」。

近藤さんは、母たちの居場所づくりにも取り組んでいます。

自分らしくいられる居場所を

INTERVIEW

こどもが、おさんぽで見つけたことや楽しかったことを教えてくれます。自然の中で遊んで、好きなことをする時間は、こどもにとってかけがえのない経験だと思います。



片桐 佳奈恵さん
瑛大ちゃん

おさんぽやなないろの活動を通してつながった「岡田農園」で、母たちが野菜を手入れする「畑の母さん部隊」。収穫した野菜で簡単な料理をしたり、おしゃべりしたり。肩の力を抜いて「一人の女性」に戻れる時間を作っています。

ここは、こどもがこどもらしくいられる場所であり、母たちが思いを語れる居場所。近藤さんの思いに共感し、つながった人たちが、新しい輪を広げています。



ただではなく、関心のあることを同じ目線で話し合えました。「大変なことも多いけれど、充実した毎日を送れています。背伸びせず等身大のままで、やってみたいことを仲間と話し、一緒に踏み出してみると、想像しなかった新しい世界が待っていました。このまちで子育てできて良かった」。

平見さんは、日々を周りの人に励まされながら、やってみたいことをこのまちで少しずつ形にしていきます。

木

漏れ日の差す森で、木に結んだ縄が地面を打つたび、落ち葉と笑い声が跳ね上がります。

豊かな自然の中で、散歩や遊びを通じてこどもたちが自分の色で輝く場所「NPO法人おさんぽやなないろ」。代表の近藤綾子さんが縄を回すと、

こどもたちのはしゃぐ声が聞こえます。

「こどもがこどもらしく、ありのままにいられる居場所をつくりたい」と話す近藤さん。

「市内で保育士として働いていた時、自然の中で全力で楽しむこどもたちの姿に、はっとしました。土を触って、木の実を見つけて『これ好き』って思う気持ち。その瞬間を大切にできる場所をつくりたいと思ったんです」。だからここでは、こども一人が主役。自分のやりたいことと向き合い表現することを一番大事にしています。





どんな小さな布にも

命を吹き込む



畑の中で

顔が見える関係を



こどもたちでにぎわうサツマイモ畑。隣には大鍋たっぶりの温かいみそ汁が出来る上がっています。

おさんばやないろの「小学生畑クラブ」。この畑を管理し、活動を支える岡田農園代表の岡田直美さん。「生産者の顔が分かる野菜を食卓へ」と、栽培期間中農薬・化学肥料不使用で野菜を育て、地産地消を広めています。「こどもが安心して食べられる野菜を作りたい」。最初は、ただそれだけの思いだったと話します。

転機は、市内での農業講座。「本格的な手順を学ぶ講座で。

知識が付いたら野菜作りが面白くなって、『畑を持ちたい』と思うようになりました。」

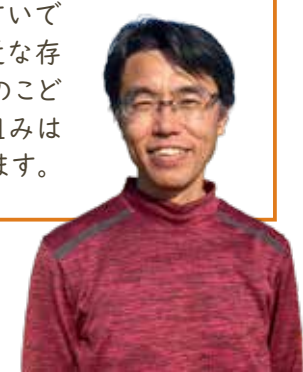
**やりたい気持ちに
応えるまちの『土壌』**

とはいえ、土地・設備・経験の全て、ゼロからのスタートです。そんな時、地元農家の人が「うちの畑でやってみたら」と声を掛けてくれたのです。さらに、近くの農家の皆さんが作業を気に掛け、知識や経験を惜しみなく教えてくれました。



INTERVIEW

農業講座で岡田さんと知り合いました。大府はまちの大きさがちょうどよく、イベントなどで交流する機会が多いので、顔の見える関係が築きやすいです。それに農業も身近な存在。こんなにたくさんのこどもが集まる農の取り組みは大府ならではのだと思います。



桑原 寛文さん

「やりたい」と言えば、挑戦させてくれる人たち。ここでの出会いが、岡田さんを就農へと後押ししました。

現在は3つの畑を持ち、飲食店への提供や対面販売などを行う岡田さん。畑の一部はこのクラブや畑の母さん部隊として、週末に親子が笑顔で野菜を手入れする、このまちらではの新しい農業の形となっています。

神 社の境内、穏やかな日の秋のマルシェ。多彩な色や質感の生地で作られたバッグやポーチが、白いテントに並びます。オンラインワンの一品を手にする来場者との会話が聞こえてきます。

グラフィックデザイナーの加藤協子さんとカラーセラピストの岡田淑さん。2人の共通点は「生地が大好き」であること。知り合う前、加藤さんは服飾業界内で未利用の布が大量廃棄されていることに胸を痛め、その布を利用し、個人で活動していました。それぞれ2児の母である2人は、おさんばやないろで出会います。

**ハギレのハギレの
ハギレまで使い切る**

話すうちに、お互いが育児や介護に忙しくしていること、生地に対して思いがあることが



「日頃忙しくて、ついおしゃれの優先度を下げてしまいう女性に『私ってやっぱりかわいいじゃん』と思い出してほしいです。ありのままの自分を感じて、きつかけになればと思って活動を続けています」。

布の買い付けから販売までを協力して行ううちに、繊維企業や生地の色分け作業を依頼する福祉施設など、関わりの輪が広がります。おさんばやないろと大学生との連携企画でスモック制作にも携わりました。捨てられるはずの生地から価値を加えて生まれ変わった小物たち。マルシェで手に取った人の笑顔を見て、2人は話します。





こどもと共に、おさんぽやなないろに集まった母たち。
公園で顔を合わせ、イベントで声を掛け合い、
子育ての悩みを話すうちに、それぞれが思いを語り合い、
次第に、自分たちが集まれば何かできるかもと感じ始めたのです。

ある日、近藤さんがフェアトレード※という言葉を知ります。
着たり、食べたりするものが、どこで、どんなふうに使われているのか。
そこに思いをはせ、購入するときにほんの少し考えてみてもらいたい。
外国の話のようだけど、普段買うものでも大切なことだね。
顔を見合わせた母たち。
「私たち、一緒なら、できるんじゃない？」

自分たちが楽しみながら、こどもたちの未来のためにできることを。
徐々に思いがまとまっていきます。
一つの共同体として、歩み始める彼女たち。
まちを元気づける活動から一歩ずつ、未来へつなげていこう。



Design 加藤協子

SINCE 2021.4.1

おおぶフェアトレードタウン推進委員会誕生

委員会の目的は、フェアトレード商品の販売と啓発を通して、地球や人を大切にするまちをつくること。活動は、お互いの事情に合わせ、動ける人が動く。母たちだからこそできる、背伸びをしない自然体の市民活動が始まります。

※フェアトレード 経済・労働環境・自然環境に配慮した、生産者と購入者の対等な取引のこと。



廃棄されるバナナをなくそう

「ぼこぼこバナナPROJECT」

メンバーの志知好恵さんを中心に、規格外で廃棄されるフィリピン産バナナを流通させる取り組みを始めました。

INTERVIEW

私も何かできるかと思い、メンバーになりました。バナナは果肉から茎まで、料理や紙作りなど工夫次第で幅広く活用できる面白い素材です。協力してくれる学校やマルシェなどがたくさんあるので、今後の広がりが楽しみです。

志知 好恵さん



それぞれの思いが重なり、まちの力へ



今度は、私の番



以前からコーヒーを自宅で焙煎し、ドリップして持ち歩くほどの愛好家だと言う北林貴予さん。
5年前、家族と大府に転入しましたが、煙や匂いで近隣に迷惑が掛かるため、新居での焙煎を諦めていました。
ある日、こどものおもちゃを買いに入った市内の店で、店主にふとその悩みをこぼすと「ここは周りに民家がないから煙が出て大丈夫。裏にスペースがあるから良かったら使って」と声を掛けられました。一人の顧客の問題に寄り添い、背中を押してくれたことがうれしかったと話します。そこから小さな焙煎機と向き合う日々が始まります。

この豆を育てた人はどんな毎日を送っているのだろう

豆の表情と向き合ううちに、異国のコーヒー畑で働く人の姿が頭に浮かび、生産者が分かる豆を選ぶようになった北林さん。これらのコーヒー豆を広めたいという思いが強くなり、焙煎・販売する自社ブランド「かなふや」を設立します。
北崎町の丘陵地にある、社会福祉法人憩の郷が運営する「カフェライム」。北林さんの入れるコーヒーの香りが店内を包んでいます。
「当時学校を休みがちだった息子と、憩の郷のイベントに参加したことがきっかけです。」



そこでコーヒーの提供をしないかと声を掛けてもらったんです。その後、カフェライムの創業メンバーとして、焙煎を任せたいと誘いを受けます。「もっと焙煎ができる」という直感と同時に、あの時自分を応援してくれた店主のことを思い出します。「今度は私の番だ」。
「まちの人との出会いがなかったら、コーヒーはきつと趣味のままでした。今は、自分の好きなことを誰かと共有できるのが本当にうれしいです」。
このまちで、たくさんの人がつながりあって、自分のコーヒーを応援してくれる。北林さんの入れたコーヒーがまちの人を結び、彼女を導きます。





食品・雑貨など多様な団体が
出店するフェアトレードマルシェ。
始まった2年前はわずかな店舗
数でしたが、徐々に輪が広がり、
現在では年2回、18店舗が集う
一大イベントへと成長しています。

INTERVIEW つおぎてや 杉山 修一さん

市民グループをはじめ、学生の活動紹介や
ワークショップなど、多様な団体が集まり、にぎ
やかなマルシェでした。買い物だけではなく、
人や思いがにつながる場になっていて、温かい
一体感を生んでいました。



年齢や性別を問わず、
多くの人に親しまれるコーヒー。
身近なものからフェアトレードを知ってほしい。
そんな思いから生まれたのが、
市オリジナルのドリップバッグコーヒー
「Obu Fairtrade Coffee」です。

「市民参加型の試飲会を開催」

大府駅東多目的スペースと市役所で、北林さんが厳選した2種類のコーヒーを
約200人の市民が試飲し、好みの味に投票しました。

INTERVIEW 北林 貴予さん

僅差で東ティモール産の豆をメインに
したブレンドに決まりました。いろいろ
な世代の方が、飲み比べながら産地や
作り手にも関心を持ってきて。
皆さんが真剣に選んでくれたことが、
うれしかったです。

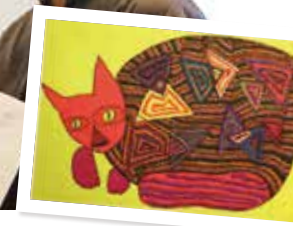


「パラアーティストの
すてきなデザイン」

コーヒーのパッケージには、パラアーティストの
山下賢志さんの『ミドリオナガドリとアロエの花』
と、岩堀里美さんの『魚をたくさん食べた猫』の
2点の絵画を採用。美術の祭典「パラアートおお
ぶ2024」で展示されたものの中から、世界観や
色使いがすてきな作品を選びました。



作者・岩堀 里美さん(写真中央)



作者・山下賢志さんの母
山下 智子さん

INTERVIEW

多くの方に作品を見てもらえてうれしいです。
本人が商品のパッケージを眺めて、とても喜んで
いたことが何より。創作活動を続けてきたから
こそ、今回のようなご縁が生まれました。たくさん
の人にほめられ、人とのつながりが広がる中で、
少しずつ自信がついてきていると感じます。



国際交流協会と連携した中学生向け
のフェアトレードワークショップ。

コーヒーを例に、産地から消費者に
届くまでのストーリーを聞き、自分で豆を
ひいて、ラベルを描いた世界に1つだけ
のドリップバッグを作りました。

児玉 希さん

國澤 胡音さん



フェアトレードという言葉
初めて知りました。コーヒーの産地で
課題になっている生産や環境の問題に
についても学びました。家族と一緒にコー
ヒーを飲みながら、今日学んだことを話
してみたいと思います。



INTERVIEW 平見 舞子さん

身近な商品が店に並ぶまでに、どんな道のりをたどっているのか。自分が
商品を手に取るとき、それが未来にとって良い選択なのか。物を購入する際
の新しい視点を知ってもらえました。今後は、こどもたちが「やってみたい」と
思ったときに、一緒に挑戦できる機会をつくりたいです。みんなの夢に寄り
添いながら、共に歩いていけたらと思います。





フェアトレードタウン認定に向けて始動



2025年6月の議会で、会派を越えた全議員が、フェアトレードの理念を尊重し推進することを決議。翌月には、岡村市長が委員会と共に「健康都市おおぶフェアトレード宣言」を行いました。

委員会は、市や議会と連携し、まちを挙げて格差のない社会の実現に向かう「フェアトレードタウン認定」を目指します。

「 大府のママたち、全国へ 」

委員会は「フェアトレード全国フォーラム2025」に招待され、「日本8番目のフェアトレードタウン認定に一番近い愛知県大府市の子育てママたち」として、代表の平見さんが登壇。これまでの活動実績と市内での取り組みを発表しました。

同じ思いを持つ全国の仲間たちとの交流が広がっています。



母たちが主導し、 まちがつながるのは大府市ならではの

国内の認定に関わり、多くのまちを見てきました。日本でフェアトレードの取り組みが広がっている地域では、市民活動が盛んなことが共通しています。ただ、行政や企業、多くの市民と意思を一つにするのは難しく、認定の手前で立ち止まるまちも少なくありません。その中で大府市は、ママさんたちが中心となり、周りがそれを真正面から応える形で活動の輪を広げています。これは他の地域には例がありません。どんな立場からでも声が届き広がるまちの風土は、大きな誇りだと思います。

一般社団法人 日本フェアトレード・フォーラム 顧問 渡辺 龍也さん

KIYOMIZU GLOBAL BUSINESS(株)(宮内町)



「 現地の努力を形にして、継続させたい 」

フィリピンの小さな農場「JaLees Farms」で作られたヒラタケをココナッツオイルで揚げたスナック菓子。栽培から加工・販売まで一貫して行う企業努力に感銘を受け、直接買い付けて日本で販路を開拓しています。



「名古屋のイベントで委員会と出会い、彼女たちのマルシェに出品するようになりました。実は営業に必死で、フェアトレードという意識はほとんどなかったんです。フィリピンの農場を直接見て、『この商品をなんとか日本で売って、事業を継続してほしい』と。これはフェアトレードの本質だったんですね。委員会との出会いで答え合わせができました」。

谷 陽さん

白いオリーブ(桃山町)



「 オリーブを通して、共に成長 」

知多半島でオリーブを栽培し、自主製品の開発・販売をしています。

「名古屋のマルシェで、設立直後の委員会と知り合いました。市内でマルシェを開きたいという相談を受け、店舗の駐車場を使ってもらいました。頼ってもらえたことがうれしくて。コーヒーやアクセサリなど、委員会とのコラボ商品もいろいろ生まれました。応援する企業というよりも、高め合う仲間ですね。近くで見守り、支え合える関係をこれからも大切にしていきたいです」。

亀山 絵美さん



愛三工業(株)(共和町)



「 ものづくりの会社だからこそ、 顔の見える商品を 」 中根 英登さん

自動車部品製造の大手企業、愛三工業(株)。ここでは、月に一度、従業員約2000人を対象に、市内農家の野菜を販売する「愛三マルシェ」を開催しています。市の事業に参加した従業員が、生産者の声を直接聞き、地産地消に貢献したいという思いから始まりました。11月からは、ここに「Obu Fairtrade Coffee」も登場しています。

「愛三マルシェは、社員と生産者をつなげるこだわりの企画です。お互いに顔の見える関係を大切にしているからこそ、手に取りやすく、安心してもらったのだと思います」。





おおぶフェアトレードMAPを制作



まちに広がる

市内でフェアトレード商品を取り扱う店舗が分かる「おおぶフェアトレードMAP」。

日本福祉大学附属高等学校 国際協力部の生徒の皆さんが委員会と共に制作しました。一店舗ずつ足を運んで調査し、委員会の加藤さんがデザインしました。マップは、市内公共施設や掲載店舗で配布しています。



INTERVIEW

美容室でフェアトレードの染料が使われていたり、スーパーで香辛料や塩が販売されていたりと、意外な商品がたくさんあって面白かったです。大府市からフェアトレードの輪を広げ、いつか「フェアトレード半島」をつくりたいです。

廣瀬 芽生さん 山田 結さん 永田 かのさん



母親って、子育て、介護、家事、仕事、趣味、本当に忙しい。やりたいこととやらなくちゃいけないことを両立させるのって本当に大変だなって思います。全員母である私たちは、この委員会を立ち上げても「ゆっくり、じっくり、着実に」を合言葉にしていたので、こんなにも早く、大きく活動が広がるなんて、とても想像していませんでした。出会う場所があって、隣で応援してくれる人がたくさんいるこのまちだからこそ、私たちがそれぞれが踏み出せし、つながり合えたんだと思います。

日本ではまだまだ珍しいこの取り組みが、このまちで広がったことは、偶然じゃないと思う。だから、声を大にして言いたいです。

大府市は、やってみたいがかなうまち

おおぶフェアトレードタウン推進委員会 代表 平見 舞子さん



PICK UP

市内には、この他にもフェアトレード商品を取り扱う店舗がたくさんあります。ぜひ一度、足を運んで、商品の魅力に触れてみてください。

イヤサカヤ
弥栄屋



主な取扱品 食品・日用品など

〒 共和町2-18-8
☎ (74) 8793
休 (水)(日)(祝)
時 11:00~17:00



木のおもちゃ 峠のお店



主な取扱品 チョコレート・ドライフルーツなど

〒 共和町峠45-5
☎ (46) 2524
休 (水)
時 10:00~18:00(平日は13:00から)

